報告用紙①

関西学院大学　研究成果報告

2023年4月4日

関西学院 院長殿

所属：商学部
職名：准教授
氏名：島貫香代子

以下のとおり、報告いたします。

研究制度	□関西学院留学　長期（滞在国：　　） ☑関西学院留学　短期（滞在国：フランス） □宣教師研究期間 □関西学院外留学（滞在国：　　）
研究課題	ウィリアム・フォークナーの作品における住まいと暮らしに関する研究 ――ジム・クロウの影響と失われた世代との比較を中心に
研究実施場所	パリ・シテ大学
研究期間	2022年9月1日　～　2023年3月11日（6ヶ月）

◆ **研究成果概要**　(2,500字程度)

上記研究課題に即して実施したことを具体的に記述してください。

本留学は当初、2021年度に実施される予定であったが、新型コロナウイルスの感染拡大にともなう特別措置に基づき、2022年度に実施された。

私はアメリカ文学・文化を専門としているが、本留学で留学課題に取り組むにあたり、研究の視野を広げるため、アメリカではなくフランスに滞在して研究を行った。本留学で中心となる作家はアメリカ南部出身のウィリアム・フォークナーだが、実は彼とフランスの関係は深い。駆け出しの作家であった1925年後半に彼はフランスを訪れているし、彼の作品にはフランス文学と哲学の影響が強く見られる。オノレ・ド・バルザックの作品群の総称である『人間喜劇』の同一人物再登場法を意識して創作された、フォークナーの故郷ミシシッピ州北部を舞台とした一連のヨクナパトーファ作品群は特に有名である。さらに、フォークナーの作品を（アメリカを含む）他国に先駆けて1930年代から評価していたフランスは、フォークナー研究が最も盛んな国の一つでもある。本留学では、フォークナーがフランスで訪れたり影響を受けたりしたと思われる場所を訪問し、フランスのアメリカ文学研究者などと情報交換・意見交換を行うことで、研究上の新たな視点を得ることができた。

「ジム・クロウ」とは、世紀転換期頃からとりわけアメリカ南部で白人と有色人種（主に黒人）の線引きを行うために実施された人種差別・隔離政策であり、法制度や社会基準、ひいては人種間作法に及ぶ幅広い用語である。こうした人種問題はアメリカ南部に限った話ではない。アメリカ北部でもジム・クロウは浸透していたし、植民地帝国であったフランスも歴史的に多

くの移民を受け入れてきた多民族・多文化国家であり、現在はイスラムフォビアといったさまざまな軋轢も生じている。本留学ではパリに滞在したが、人種のるつぼのパリには、日本人街、アフリカ人街、スリランカ・タミル人街、アラブ人街、インド人街、トルコ人街、ベトナム・中華街、多国籍人街（ベルヴィル）などさまざまなカルチェ（界隈）が存在する。フォークナー作品におけるジム・クロウの影響を中心に、住まいと暮らしの観点から人種・民族問題を主に研究してきた私にとって、パリは人種・民族の共生や棲み分けの可能性と限界を考えるうえできわめて示唆的な場所となった。パリ以外に目を向けても、国境沿いのアルザス地方、バスク地方、カタルーニャ地方の民族問題も歴史的に根深い（実際に各地方を訪問してそれを実感した）。本留学では、複雑な人種・民族問題についてパリやフランス各所で現地調査を行い、その結果を敷衍して、グローバルな視点から多面的・多角的な検討を行い、フォークナー作品の人種・民族問題に関する解決策の糸口を探ることができた。

フォークナーはフランス滞在時に第一次世界大戦の西部戦線を訪れ、その経験を多くの作品に活かしている。そこで本留学では、フォークナー作品の重要なテーマの一つである戦争について考察を深めるため、フランスの第一次世界大戦と第二次世界大戦の戦跡を訪れた。フォークナーも訪れたコンピエーニュでは、休戦記念館とロワイヤリュー収容所記念館を見学した。さらに第一次世界大戦の激戦地の一つであったヴェルダンを訪れ、フランス軍のヴェルダン本部、ドゥオモン納骨堂、ドゥオモン要塞、戦争で破壊された町フルーリー、アルゴンヌ戦場のヴォクワの丘を訪問し、この大戦の悲惨さと複雑な要因に関する示唆を得た。第二次世界大戦の戦跡としてはバイユーを訪れ、戦禍を免れたノートルダム大聖堂と第二次世界大戦直後にド・ゴール将軍が最初に解放演説を行った広場を見学した。第二次世界大戦で連合軍（アメリカ軍）とドイツ軍が死闘を繰り広げたオマハ・ビーチではノルマンディ上陸作戦の舞台となった戦場を訪れ、その後のカンの平和記念館ではノルマンディ上陸作戦のDデイについて学ぶことができた。カンはフォークナーも1925年に訪れているが、焼け野原と化した第二次世界大戦よりも前の1925年の話なので、戦後のカンはだいぶ様子が変わってしまったであろう。時の流れや町の歴史的変遷にも思いをはせた。

本留学では、駆け出し時代にパリに滞在したフォークナーの同時代作家（特にアーネスト・ヘミングウェイ）との比較研究も行った。1920年代当時、パリにはフォークナーを含む「失われた世代」と呼ばれたアメリカ人作家・芸術家が数多く滞在していた。第一次世界大戦後、これらの若者たちは未来に希望が持てず､酒や遊びに溺れた自堕落で享楽的な日々を送る一方で、戦争で失われた価値観や秩序に変わる新しい表現手段を求めていた。本留学では、アメリカ人作家・芸術家がパリで滞在した場所や、彼らが刺激を受けた文学・音楽・美術・演劇・映像について現地調査や情報収集を行い、彼らの模索と挑戦についても考察を深めることができた。特にヘミングウェイは、フォークナーや他の同時代作家・芸術家よりも、当時のパリ関連の文献と現在のパリのカルチェ・ラタンやモンパルナス界隈の史跡において多く言及されている印象であった。パリに移り住んだアフリカ系アメリカ人（特にジョセフィン・ベイカー、リチャード・ライト、ジェイムズ・ボールドウィン）についても大きな示唆を得ることができた。

本留学の具体的な成果としては、2022年11月28日にパリ・シテ大学のLARCA（Le Laboratoire de Recherches sur les Cultures Anglophones）のFLTセミナーで行った研究発表“Americans in France: Racial Struggles of William Faulkner, Josephine Baker, and *Flags in the Dust*’s Caspey”がある。パリ・シテ大学の同僚や他のフランスのアメリカ文学研究者との意見交換を通じて、とりわけ人種・民族問題の描写に対する彼らの姿勢や立場を知る機会を得て、これまでこのテーマに取り組んできた私のスタンスを批判的に吟味することができた。研究論文としては、「ジム・クロウへの抵抗と服従―『土にまみれた旗』におけるフランスの影響とアメリカの対応―」と「“These People Are Not Your People”―『サンクチュアリ』における人種問題と階級問題―」が『商学論究（商学部開設70周年、商科開設110周年記念号）』第70巻第1・2号（2022年12月、709～725頁）と『商学論究（梅咲敦子博士記念号）』第70巻第4号（2023年3月、115～132頁）にそれぞれ掲載された。どちらの論文でもフランスに言及しており、本留学でフランスに滞在することになったからこその内容となった。さまざまな知見や経験を得ることのできた本留学に心から感謝したい。

以　上

提出期限：研究期間終了後2ヶ月以内

提出先：研究推進社会連携機構（NUC）

※関西学院留学は所属長を経て、宣教師研究期間は大学教員は学部長及び学長を経て院長に、高中部教員は各部長及び高中部長を経て院長に提出してください。

◆研究成果概要は、大学ホームページにて公開します。研究遂行上大学ホームページでの公開に支障がある場合は研究推進社会連携機構までご連絡ください。